

本号はボリュームが大きいので2通に分けて配信しています
先に配信した後半部は投稿記事が欠落してしまいましたので、再送し
ます。
皆様、投稿者さんにはご迷惑をおかけしてしました。

INDEX

- 4 投稿 モルモン教と出会って まあくん
- 5 連載 リアホナを斬る (第9回) 木塚灯八
- 6 論文紹介 アメリカ西部の人権感覚 ユタ・モルモン教のケース

以下前半からの続きです

投稿 モルモン教と出会って まあくん

【自己紹介】

私は神様を信じる。これは家庭の影響が大きい。実家が神道だから。10年ほど前宣教師のハウジング、英会話教室がきっかけでバプテスマを受ける。宗教を二つ持つ、ということに少々戸惑いはあったが、周りの人たちはいい人たちばかりだったし、神様を信じようとする気持ちには変わりはないということ自分なりに納得していた。

しかし昨日まで信じてなかったものを、すぐに信じるというのはさすがに無理があり、こんなんでもバプテスマ受けてしまっただけで良かったのか？という気持ちも完全に払拭できないでいた。その場に流されて安易にバプテスマを受けてしまった自分も悪いとは思っている。

その後教会員になってからも、どうも教義に対しては納得できない部分があった。律法主義を否定しながら律法にこだわっている(ようにしか見えない)。尋ねる疑問には、答えてはくれるが、納得のいく答えは返ってこない。自分なりの解釈を加えて自分自身を納得させることもできなくはないが、少なくとも「感動」はない。自分の心に働きかける感動を感じなければ信仰も育たない。神様は信じるが、モルモンの信仰は結局持てなかった。今振り返れば、人間関係がよかったという理由だけで、戒めや責任を十分に果たすことがいつまでも続くわけもなく、今ではお休み会員。

おそらくバプテスマを受けてお休み会員になってしまうほとんどは私のようなパターンだと思う。つまりモルモンに対する信仰は養われず、人間関係のよさを信仰と勘違いしてしまうパターン。

そして反モルモンのサイトで、教会の矛盾、過去の過ちを知る。いままで全く知らされていなかったことや、「やっぱりそうだよな～」と納得したこと色々あった。そして心に傷を負った方がいる、という事実も知った。幸い自分は、いままでの教会員生活の中で、そのような被害を被ったことはなかったが、教義の内容、自分の経験から、教会がそのような被害者を生み出す可能性はあると思えた。だから被害者がいるという反モルモンの情報は嘘ではないと思えた。

宗教は個人の自由だし、宗教は多少他人に理解できない部分があってもそれはそういうものなのだろう。だから理屈だけが全てとは思わない。信じている本人が幸せであるならそれでよい。しかし、もしその宗教が人に迷惑をかけているのなら話は別。間違いがあるのなら直さないとイケない。

それが未だに私がモルモンに籍を残している理由の一つ。上手く言えないが、籍を残すことで、この問題を他人事にしないようにしたかった。

そして、私にも、個人的に「教会の実態」を知ってもらいたい教会員がいる。その教会員に自分の気持ちを伝えるためには、自分がいちおう教会員でいた方が話がしやすいと思った。それがもう一つの理由。

聖書の知識も人生的経験もモルモン教義にも乏しい私が、モルモン教義の矛盾を具体的、論理的に指摘することではできないかもしれないが、そんな私でも「やっぱりモルモン教会がおかしい」、と強く思った経験をこの場を借りていくつか書きたい。

【死んだら土に帰りたい】

祖母が死んだとき、父は骨壺の底を割って納骨した。なぜそのようなことをするのかと父に尋ねたら、

「おばあさんの遺言で、死んだら土に帰りたいと言っていたから、おばあさん、土に帰すよ」

それを聞いて自分はいろんな意味でショックを受けた。おばあさんはそんなことを考えていたんだ。土に帰りたいとはどういう心境だろう。今の私には土に帰りたいなんて言えない。今の私はそんなに純粋で無欲ではない。

それに比べれば「昇栄したい」という欲のなんと「俗」的なことか。孫に買ってもらった杖と上着を大事にし、たったそれだけでも「わては幸せや」と涙

だけど、モルモンの教えだと祖母は教会員じゃないから救われない。唯一真の教会に入らないと救われないという教義だから。

ばあさんみたいな人でも救われない。

そりゃ、生きている間福音を知らなかった場合、身代わりのバプテスマ、とか救いのオプションは他にも残されているかもしれないけど、そんな後から取ってつけたような救い信じられん。

幼子のように純粋でなければ・・・と説く聖書を聖典にしているはずのモルモン教は、純粋であることを理解できているのか？

神様からみて、うちのばあさんが純粋なのかどうかは私にはわからない。しかし私から見たら、ばあさんは自分や「昇栄を勝ち取れ」と謳う教会員よりは純粋だと思う。

【教会員からの手紙】

私には、個人的に教会の実態を知ってもらいそして一緒に考えてもらいたいと思うモルモン教活発会員の家族がいる。ものすごい素敵な家族だ。今私は仕事の都合で遠いところにいるが、時々手紙のやりとりをすることがある。その家族のお父さんは筆不精な方で、滅多に手紙を書くことはない。いつもは他の家族が書いて送ってくれる。もちろんそれはそれでうれしい。だけどいつぞやの手紙に、そのお父さんからの手紙が入っていた。「字が下手なのであまり手紙書いたことがありません。～」と始まり、短い文章と絵を故意に下手に描いて送ってくれた。お母さんから「滅多に手紙を書かない人だけど、まあくん兄弟が好きだから書いたんだよ」と付け加えられていた。

めちゃくちゃうれしかった。だれでもあたりまえだろうけど。そのお父さんお母さんが改宗者で、子供達は2世会員。お父さんが改宗した理由は「家族を大事にする教会だから」

お父さん、私は知って欲しい。家族を大事にする教会は、モルモンだけではない。どのキリスト教会だって家族を大事にする。だからあなたがそんなに素敵な人なのは、もちろんモルモン教会の教えがあったという部分もあるだろうけど、それは他の教会だったとしてもきっとあなたはそのまま素敵なお父さんで、きっと同じように素敵な子供たちに恵まれたはず。だから、モルモンだったからこんなに恵まれたんだ、という「狭い」考え方は改めて欲しい。

あなたの子供の一人が自分の考えで教会を離れても、なにも悩む必要はない。その子ですでに成人し、自分の考えでモルモン教会を離れた。お父さんが悩む気持ちはわかるけど、きっと一番悩んだのは2世として育ち教会を離れた子供の方だと思う。お父さんが悩むことがきっと子供にとって一番つらいことだと思う。そしてあなたが悩むのは、教会を離れてしまったらその子は救われないかもしれない、というモルモン教義が心の片隅にこびりついているからだと思う。

そんなことはない。あなたみたいな人を、そしてあなたが育てた素敵な子供たちを、神様が救わないはずがない。「教会を離れたら、家族は救われない」なんて考えは私は間違いだと思う。

というか、あなたの信じる神様ってそんなことであなたを評価するの？

あなたが家族を平等に最大に愛している、神様にとって、私たちにとって、なによりそのことが大切なんじゃないの？

もしあなたがモルモン教会に集うことで心の平安が得られるのなら、モルモン教会を辞める、とまでは言わない。だけどあなたが描く「家族を大事にする教会」ってどういう教会かをもう一度考えて欲しい。

【いまさら辞めることはできないから・・・】

ある教会員と、教会の教義のことについて二人だけで話し合ったことがある。予想はしていたが、やっぱり話がちっともかみ合わない。それでも私が「教会はおかしいところがある」と思っていることは少し理解してもらったようだった。そしてその子が最後に言った言葉が私には印象的だった。

「でももう今更教会を辞めることはできないから・・・」

その子は真面目な2世会員。いきなり私に「教会はおかしい」と突きつけられても、それまで自分の人生のすべてを教会員として過ごしてきたことを考えれば、戸惑うだけでしかないだろう。「もう今更～」と言う言葉の中に、そんな驚き、焦り、困惑のような感情が伺えた。

時々その子とはメールをやりとりすることがある。しばらくすれば伝道にも出たいとのこと。「私はこの福音はどうしても伝えたいと思うから」そう言っていた。私は福音を伝えたいという気持自体は、非常に大切だと思うし間違ってもいいと思う。何はともあれ宣教師たる者その「気持ち」がまず基本であると思う。

だけど伝道は、仮にも人の人生を大きく左右するかもしれない宗教を扱うこと。「気持ち」があればよいというわけでもない。他人の人生に積極的に関わっていく「責任」を持って欲しいと思う。人間関係の良さをアピールすることと福音を伝えることをごちゃ混ぜにした伝道者になってもらいたくない。誰かに宗教を説く。その重大さがわかれば、自ずとモルモン教義を真剣に見つめることもできるのではないかと思う。

その子が伝道にでる前に、もう一度ゆっくり話をしたいと思った。

【日曜学校にて】

もうかれこれ2年ほど前、たまたま教会に集ったその日の日曜学校で、「昇栄する目的は何でしょう」という質問があった。例によって、教師はみんなに聞いて回る。みんないろいろ言う。「永遠の命を得るため」「家族と一緒にすごすため」「神のみもとに帰るため」いろいろ出た。いよいよみんな言うべき

とになるとは思わなかった「神に・・・なる」という意見が出た。

誰も特に突っ込みはしなかった。

たぶんこの手のことに突っ込みを入れると日曜学校が収拾つかなくなると思
って誰も何も言わなかったのではないと思うが、たぶんこの意見に対して、
あのときの出席者中の誰一人も疑問を持たなかったとは思えない。

教師の方自身も「神に・・・なる、・・・ですか」とちょっとためらいがち
にホワイトボードに書き上げ

「まあ、たくさん出ましたが、みなさんその通りですね、云々」

と言葉を濁して日曜学校は進められた。元教会員の人ならだいたいはその場
のイメージはつくのではないと思う。

一夫多妻、黒人差別、人間は神になる説、などなどトンデモ教義についての
話は反モルモンサイトで私はすでに知っており、おかしいところがある宗教
だなど知ってはいたが、実際に現役モルモンの人からそのような事実を直接聞
くことはなかったので、このときはさすがに驚いた。やっぱり嘘じゃなかった
んだ。

しかしなあ。そんな致命的かつ重要なことはバプテスマ受ける前に教えてく
れるべきだと思うのだが。しかも私はバプテスマを受けるレッスンで宣教師か
ら「神様は一人です」って習ったんだけど・・・などと言うとおそらく教会
員は、「赤ん坊に数学を教えるのと同じで、それはバプテスマ受けるときには
まだ教えるべき教義ではないから教わらなかったのだ」とか言うだろうな。た
とえそうだとすると、そういうやり方は少なくとも人として誠実な方法ではな
いと思う。

人間は神になる説は、教会の中しか知らない教会員は、教会員であるにもか
かわらず知らない教義だと思う。もし教会員と、神様になる説について話す機
会があれば聞いてみたいのが、私の素直で間抜けな次の質問。

「あなたは、本当に神様になりたいと思うのですか？」

「神様のような素晴らしい人になりたい」ではない。「昇栄したい(天国に
行きたい)」ではない。神様そのものになる、という教義に何も疑問を感じな
いのか。

神様になるということはどういうことかは想像もできないが、神様のような
完全無欠の存在になることを目標にする前に、なぜ「人間でいることの素晴ら
しさ」を考えないのか。

たぶん神様ってなんでも知っているから、新しいことに「感動」することな
んでない、と思う。感動することのできる人間って素晴らしいと私は思う。

神様の境地はわからないが、感動できない存在にはなりたくない。それが間
抜けな私が思う「神様の唯一の欠点」感動することのできる人間でいることに
感謝する。

もちろん人は時に「悪いこと」もしてしまう。悪いことをする人間が素晴ら
しいと言っているわけではない。それはまた別の問題。「生まれたからには、
自分の醜いところ、いいところ、顔のまずいところ全部を背負って生きていく
、まあくんという名前を一生背負って生きていく」とは、行きつけの居酒屋の
親父が言ってた言葉。

「神になる」なんて教えよりよっぽど感動する言葉だと思う。

【反モルモン】

反モルモンの方たちを知って、いろいろ教えていただいた。それらをいち
いち挙げればきりが無い。モルモン教しか知らなかった頃の自分と、反モルモン
からキリスト教の考え方を教えていただいた今の自分が、決定的に変わったと
思えること。それを端的に表せるとしたら、それは次の質問にどう答えるか、
だろう。モルモン教会でもよく聞かれる質問。

「あなたは、イエスが十字架にかかったときにそこに居た人々の中で、自分
をたとえとどの人に近いと思いますか？ イエス？ 律法学者？ 群衆？ 使徒たち
？ イエスを鞭打った兵士？ イエスと一緒にはりつけになった罪人？ e t c」

モルモンしか知らなかった頃の自分なら、きっと「悩んだ」と思う。

でも今の自分は違う。自分は、律法学者であり、兵士であり、イエスを裏切
った「この時の」使徒たちです。そう答える。

先にも書いたけど、宗教は個人の自由だし、理屈だけが全てとは思わない。
大事なものは「感動」があるか。心に訴えるものがあるか、神様に対する尊厳を
感じるかどうか。私にはモルモン教会の教義より反モルモンの主張の方に「心
に響くもの」を感じた。

少なくとも、教会のシステムは人に対して誠実ではないと思う。そしてそれ
は主の教えだから、というより人間のエゴイズムによるもののように感じる（
そうとしか思えない）。だから「感動」がないのだろう。

それは改善すべきだと私は思う。

教会員は教会のためにあるのではなく、教会員のために教会があるようにな
らなければ、それは宗教ではなく、会社と同じだ。そう思う方が私には自然に
見える。

最後になるが、モルモン教を知ってよかったこと、それは皮肉にも反モルモン
を知ることができたこと、かもしれない。

連載 リアホナを斬る (第9回) 木塚灯八
2006年4月号 末日聖徒の声「解任の面接」ほか

この連載ではリアホナ誌から大管長会メッセージを取り上げることが多かつ
たのですが今回は少し趣向を変えてみたいと思います。今月号には末日聖徒の
- 375 -

一応、それぞれの話は脚色されているかも知れませんが実話であろうと思います。いずれも、何年かモルモン教会ですごせばいつかどこかで見聞きするであろう出来事であり、モルモンというものを考える材料になるものです。

【解任の面接】

これはある姉妹宣教師が伝道を終えてその任を解かれるときに、伝道部長から「結婚は神殿結婚でなければなりません」とアドバイスを受けたと言う話です。モルモンが会員同士の結婚を強く勧めていることは良く知られていることなのですが、それによって会員同士で苦しめられているという現実が書かれています。「伝道から帰ってしばらくしても結婚していなければ、傷つくような言葉を耳にするようになり、腹立たしくなったり、悲しくなったりすることがあります」とこの帰還宣教師の女性は述べています。たしかに結婚しない人からかかろう無神経な人は世間一般の中にもいるのですが、神の子です、わたしやあなた、と口にしてしまっているまことの教会の会員がそれと変わらない言動であるのはいささかお粗末です。この女性は伝道を終えて10年後に伴侶とめぐり合い2000年に神殿結婚したそうですが、伝道部長との会話から受けた祝福の大きさに感謝していると話を結んでいます。しかし、モルモン教会の中に他人の結婚にとやかく口出しをし、時に傷つける人がいること、それらは元をただせば神殿結婚をしなければ幸福になれないというモルモン教義から来ていることには、気が付いていないのです。彼女の長年の悩みとは神殿結婚をしてモルモン・コミュニティで一人前扱いされたことで解消してしまう程度のものでしたのでしょうか？ 今月号にはこの他にも「独身者と既婚者」という話も掲載されており、こうしたことからモルモン教会内では結婚していない人への無言の排斥感があるということがわかります。

【食料品か、什分の一か】

離婚して2人の子供を育てている女性の話です。年末になって会社からクリスマス商品の入った箱が送られてきた、これを販売せよという意味でその分給料がかなり減額されていた（この辺の意味がよくわからないのですが）、計算してみると一週間分の生活費しかないという状況です。

そこへやってきたホームティーチャーは「それでも什分の一を収めるように」と助言（と言えるかどうかは疑問ですが）をしてくれたそうです。ここにもモルモンの実態が明確に描かれていますが、什分の一はいかに貧しくとも、いかに生活が困難であろうとも、それは納めなければならないのです。貧しかったので什分の一を免除されたという話は、私の25年のモルモン会員生活の中で一度たりとも教会機関誌に載ったことはありません。ときどきネット上でモルモン会員が「生活に困っているなら什分の一を納める必要はありませんよ」と能天気な語っていることがありますが、現実がそんな気楽なものでないことはモルモン経験者ならよく分かっていることです。この女性は結局、什分の一を完全に納めたおかげで主が天の窓を開いて家族の必要を上回る収入を得たと、予定調和型のハッピー・エンドを迎えます。

しかしモルモンのこうした「信仰を高める話」のそれぞれはたとえ実話であったとしても、全ての人に同じ事が期待通りに起こることはないという説明をモルモン教会がすることは決してありません。むしろ起こる保証がないことをあなたも起こるかのようにはほめてあげています。特に什分の一に関しては、これは詐欺師と同じ手口ではないでしょうか？

【あなたたちの本は真実です】

何かの偶然が重なったり、予期せぬタイミングで自分の悩みが解消されたりあるいは心中を言い当てられるような出来事があると、そこに何か不思議な力が介在していると考えられる人は多いと思います。モルモン会員には特にそうしたことを好む傾向が強いように思います。そうした人が引き込まれやすい要素を持っているのでしょう。客観的にみれば「たまたま」であったり、「こじつけ」でしかなかったりするのですが、この話はまさにそうした女性の体験談です。何ヶ月か前に友人からモルモン書について聞いていた、ドアをノックする音を聞いて玄關に向かう途中、ふと旧約聖書のアブラハムのことが頭に浮かんだ、するとそこに立っていたのはモルモン宣教師だった・・・という「いかにも良くできた話」です。どうもモルモン教会はこうした話を検証もせず機関誌や教会書籍に掲載していく傾向があるようです。そのため後年、ツッコミを入れられたり、こっそりと削除したりするハメになるのですが。

私は思うのですが、こうした体験談を語る人というのは自分がヒーロー、ヒロインとなつてドラマチックな事件の中心でありたいという願いが強いのではないのでしょうか。そうした願望と空想力が自分の日常を、霊的な体験に脚色して他人に語ってしまうような気がします。モルモンの教祖ジョセフ・スミスもそうした傾向があったように思えます。

【福音の中で成長する】

これはブラジルの男性が1997年にバプテスマを受け、3ヵ月後に日曜学校会長になって日曜学校でレッスンをし、8ヵ月後にメルキゼデク神権を受けて医者では治せなかった息子の病気を治し、1年後には神殿で結び固めを受け、そしてワードの監督になったという、まさにモルモン・コミュニティにおける「成長物語」です。

しかしモルモンの言う成長とは結局、教会組織内における地位・役職が上に移ることではないのです。ネット上で様々なモルモン会員が自分たちの信じていること、行っていることについて語っていますが、彼らの言動で何か「人間的に成長している」と感じさせるものがあるのでしょうか？ モルモン会員に

話をするとき、教会の役職の話と、信仰者らしい話がいったいどれくらいの割合になっているかも考えてみて欲しいです。

モルモン教会が会員に与える成長とは、組織内で役に立つ存在になったかどうかであって、神への信仰とは全く別物なのです。

論文紹介 アメリカ西部の人権感覚 ユタ・モルモン教のケース

高橋弘先生が新しい論文「アメリカ西部の人権感覚 ユタ・モルモン教のケース」を出版されました。早速、データをお送りくださいましたので、以下にアップしました。

http://garyo.or.tv/jinken_mormon/jinken_mormon.pdf

内容は先に発表されている論文「モルモン教と暴力」の続編に位置するものです。是非、お読み下さい。

ニュースと編集後記

勇気と真実の会は会員募集中です。
詳しくは当会へお問い合わせください。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文はプレーンテキストで作成ください。

本号は内容の充実した投稿でかなりのボリュームになった。読み応えがあったのでないだろうか。次号から新しい連載も予定しているのでご期待いただきたい。

メールマガジンバックナンバーはこちらから

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

メールマガジンの購読申し込みはこちら

http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmaga.htm

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス jemnet@infoseek.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.

無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。